

第 35 号の刊行にあたって

学園長 長谷川 量平

鯉淵学園教育研究報告第 35 号をお届けいたします。同号には総説 1 報、報文 1 報、事例報告 2 報、解説が 3 報、随想 1 報掲載されています。

2024 年度より当校アグリビジネス科に赴任された藤井義晴先生は、ある植物が他の植物の生育に影響を与える現象である「アレロパシー」の世界的な研究者であり、東京農工大学に在職されていた時には、世界各国を研究フィールドにして活躍された方です。今回はその国際経験をもとにムクナ豆（ハッシュウマメ）についての総説を執筆されました。

アグリビジネス科の井上洋一先生におかれては、「集落営農」をテーマに丁寧な資料の整理をなされ、「集落営農」の役割を整理され、今後の農業政策に対して提言する報文となっております。

食品栄養科の浅津竜子先生におかれてはご自身の在職経験をもとにした食品栄養科の就職指導を日ごろの指導と同じく丁寧に事細かにまとめられ事例報告とされました。4 年制であった生活栄養科学科から 2 年生の食品栄養科への学制の変化に伴い、就

職指導も対応された努力と成果がまとめられています。

同様に、食品栄養科の勝山由美先生らによる事例報告は、浅津先生と同じく学習サポートとして、リメディアル教育と資格教育を丁寧にまとめています。浅津先生の事例報告とともに、食品栄養科の教育の姿勢を見事に示しており、他の教育施設とも比較しても大変誇らしい報告となっております。

このほか、食品栄養科助手 3 名がそれぞれ解説を 1 報ずつ執筆されています。また随想として、本誌編集委員長である、食品栄養科の野口貴彦先生が「『鯉淵学報』創刊そして『鯉淵研報』へ」とのタイトルで書かれています。長い歴史における本書の変遷がまとめられています。

第 35 号は以前と同様に食品栄養科教員からの投稿が多く、前号と同じく、次号のアグリビジネス科、農業技術センターからの多くの投稿を期待して、巻頭のことばといたします。